ハイデイ（第十三回）

――ヨハンナ・スピリ原作――

津田芳雄譯

そこでゼーゼマン氏はお醫者樣に、家の者のこらずが見たといふ、夜な〳〵玄關の戸が何者かに開けられる話をした。そしてその爲めの用意にと、ピストルを二艇持つてゐた。もし召使ひの友達かなんかが、主人の留守中を見込んでいたづらでもしてゐるのならば、一發の空發で縮み上つて退散してしまふだらうし、ほんものの泥棒が盗みに這入る時の下準備に、幽靈さわぎで家の者を夜中の物音に馴れつこにさせておかうと企らんでゐるのならばなほさらのこと、よい武器を備へておくに越したことはないと、ゼーゼマン氏は考へたからである。

二人はいつかセバスチャンとヨハンが寢ずの番をした部屋に陣取つた。テーブルの上には葡萄酒が一瓶備へてあつた。いよいよ夜明しをしなければならないやうなことにでもなれば、時々元氣づけるものが欲しくもならうかと思つたからである。その傍にはピストルが二艇と、あか〳〵と灯りのついた大ラムプが二臺。ゼーゼマン氏はうす暗い灯りの中で幽靈を待つなぞ、思つてもいやだつた。

外の廊下に明りが漏れて幽靈が怖がつて近寄らないやうなことがあつてはと、戸はぴつたりと閉めておいた。二人の紳士は氣持よささうに安樂椅子に倚り、時々葡萄酒をかたむけながら、四方山の話をしてゐるうちに、知らぬ間に十二時が打つた。

「どうやら幽靈氏は人間のにほひを嗅ぎつけて、今夜は散歩はお取り止めと見えますな」

お醫者樣が云つた。

「まあお待ちなさい。『草木も眠る丑満時』つて云ふぢやありませんか」

二人は又話をはじめた。やがて一時か鳴つた。家ぢうも、街も、しんと靜まり返つた。突然、お醫者が手を擧げた。

「しッ！　何か音がしやしませんでしたか」

二人とも、耳を澄ました。すると、門をそーつとはづして鍵をまわし、戸を開ける音が、はつきりと聞えた。ゼーゼマン氏は思はずピストルに手をのばした。

「大丈夫なんでせうな」

お醫者樣は立ち上つて云つた。

「大事はとつた方がいいです」

ゼーゼマン氏は小聲で云つて、もう一つの手にラムプをとつた。お醫者樣もピストルとラムプに身をかため、靜かに先きに立つた。

二人は廊下に出た。月光が開け放された玄關の戸から美しく射し込んで、身動きもしないで戸口に佇んでゐる白い影を照らしてゐた。

「誰だ、そこにゐるのは！」

お醫者樣はどなり付けた。その聲は二人がラムプとピストルをかざして進んで行く廊下に、すみずみまで物凄くひびきわたつた。

その影はふり向いて、低い叫び聲をあげた。小さな白いねまき姿の、それはハィディではないか！　はだしのまま、氣狂ひの樣な眼でおびえたやうにピストルとラムプを見つめたまま、風の中の木の葉のやうにからだぢうがたがた震へながら立つてゐるのだつた。二人の紳士たちは、呆氣にとられて互ひに顏を見合せた。

「おや、これはいづぞや水を汲みに行つてゐた子供ぢやありませんか、ゼーゼマンさん」

お醫者樣が云つた。

「一體これはどうしたことなんだね、お前。なにが欲しいのだ。なにしにこんなところへ降りて來たのだ」

ゼーゼマン氏もたづねた。怖ろしさに眞蒼になり、聲もきれ〴〵にハィディは答へた。

「わたし、わかりませんわ」

「まあ〳〵、これはわたしに委せておきなさい、ゼーゼマンさん」

お醫者樣は進み出た。

「あなたは部屋に引き取つて下さい。わたしはこの子を寢かせて來ます」

そしてピストルを下において、お醫者樣はやさしく子供の手を引いて二階へつれて行つてやつた。

「怖がるんぢやありませんよ。ちつとも怖くなんかないんだからね。よしよし、さあそーつと行きませう」

並んで階段を上りながらも、お醫者樣はかう云つて子供を元氣づけてやつた。

ハイディの部屋に著くと、お醫者樣はテーブルの上にランプをおいて、ハイディを抱き上げてベッドに寢かせ、よく氣を付けてお蒲團にくるんでやつた。そして傍に腰をかけて、ハイディの氣の鎭まるのを待つた。やつとハイディの震へが止まると、手をとりながらやさしく慰めるやうな聲で云つた。

「氣分がよくなつたでせう。さつきは何處へ行くつもりだつたの?」

「どこへも行くつもりぢやなかつたの。階下へ降りてるなんて、わたし知らなかつたのです。いきなりあそこに立つたるたのですわ」

ハイディは云つた。

「さう、それぢや夢を見たのですね。なにかとてもはつきり見えたり聞えたりする」

「ええ、わたし毎晩夢を見ますわ。そしていつでもおんなじ夢ばつかり。わたしがおぢいさんとこへ歸つてるて、外では樅の木が枝を鳴らす音がして、お星樣がキラ〳〵光つて、わたし、うれしくなつて戸を開けて跳び出すと、それはそれはとつてもきれいなんですの！　でも、目が覺めると、やつぱりフランクフルトにるるのですわ」

ハイディはこみ上げて來る涙を、一生懸命こらへてるた。

「どこも痛いところはありませんか。頭とかせなかとか」

「いゝえ、でも何だかこゝんとこに、重たい石がのつかつてるみたいな氣がしますの」

「何かのみ込んでつゝかゝつてるみたいなの?」

「いいえ、そんなんぢやないんです。なんだか重たくて、思ひつきり泣いて見たいやうな——」

「さう、それで、思ひつきり泣いて見ましたか」

「いゝえ、わたし、泣いちやいけないんです。ロッテンマイアさんに叱られますから」

「それで、いつもぐつとのみ込むのですね。フランクフルトはすき?」

「ええ」
ハイディは聞えないくらゐ小さな聲で答へた。でもそれはまるで「いゝえ」と云つてゐるやうだつた。
「おぢいさんと何處に暮らしてゐました？」
「お山の上で」
「ぢやつまらないんですね。時々退屈したでせう？」
「まあ、退屈なんかするものですか。それはそれはきれいなんですもの！」
ハイディはもう何も云へなくなつた。山の思ひ出や、今夜のびつくりしたことや、長い間泣きたくても泣けなかつた悲しさなどが、一度にこんぐらがつて押し寄せて來て、子供の小さな胸ひとつに支へ切れずに、瀧のやうな涙となつてあふれ出た。ハイディは大聲でしやくり上げはじめた。
お醫者樣は立ち上つて、そつとハイディの頭を枕の上にのせてやり、
「よしよし、泣きたいだけお泣きなさい。それが一番の藥です。あしたの朝は、ちやんとよくなつてゐますよ」
と云つて部屋を出て、ゼーゼマン氏の部屋へ降りて行つた。向ひ合つて安樂椅子にかけながら云つた。
「ゼーゼマンさん、あの子は夢遊病にかゝつてゐますよ。あの子こそ、夜な〳〵玄關の戸を開けて家ぢうを震へ上らせてゐた幽靈の正體です。それに、あの子はひどいホームシックにかゝつてゐて、まるで骸骨みたいに痩せこけてゐます。ほうつておけば、ほんものの骸骨になつてしまひますよ。早速何とかしなければなりません。そこで、夢遊病にもホームシックにも、療法は一つです。明日にも山へ送り歸すことです」
ゼーゼマン氏は立ち上つて、非常に心配さうに、そは〳〵と部屋中を歩きまはつた。
「やれ〳〵、あの子が夢遊病で、ホームシックにかゝつてゐるのですか。みんなこのうちで起り、うちで弱らせてしまつたことなのに、今まで誰ひとりそれに氣を付けてやる者もゐないとは！　あんなに丈夫で元氣でやつて來た子を、骸骨のやうに痩せさせて、おぢいさんのところへ送りかへせと仰しやるのですか。わたしにはそんなことは出來ません。先生、どうにかしてあの子を、もと通り元氣にしてやつて下さい。かへすのはその上の

ことです。何とかしてやつて下さい」

「ゼーゼマンさん、よく考へてなさらないといけません」

お醫者樣は云つた。

「あの子の病氣は藥でなほる性質のものではありません。もともとあんまり丈夫なたちでもありませんが、山へ歸せば山の空氣で立ち所によくなります。もし今歸さなければ――さうです、あの子には、たとへ病氣のまゝでも、永久に歸れなくなるよりは、ましぢやありませんか」

ゼーゼマン氏ははつと立ち止まつた。この一言は、ひどくこたへた。

「あなたがさう仰しやるなら、それより外はないでせう。早速手筈を整へませう」

そして、なほも色々と相談してから、お醫者樣は歸つて行つた。夜はすつかり明けはなれ、お醫者樣を送つて主人みづから戸を開けた時は、朝の光りが家ぢうに射し込んでゐた。

十三、お山の夏のゆふぐれ

ゼーゼマン氏は興奮していら〳〵しながら、大急ぎでロッテンマイアさんの部屋に行き、はげしく戸を叩きながら、呼んだ。

「大急ぎで降りて來て下さい、わたしは食堂にゐますから。すぐに旅行の支度をしなければならないのです」

ロッテンマイアさんは、びつくりして飛び起きた。時計を見ると、まだ四時半だつた。こんなに早く起きのは始めてである。一體何事が起つたのかしら。早く知りたいのと氣が立つてゐるので、ロッテンマイアさんはすつかり上がつてしまひ、あわてればあわてる程まごついて、もうちやんと着てしまつてゐる着物や帶を、血眼になつて探しまはつたりした。

その間に、ゼーゼマン氏はそれ〴〵の召使部屋に通じるベルを鳴らして、順々にみんなを起した。すると召使ひ達は、これはてつきり幽靈に襲はれた御主人が助けを求めてゐるのだと思つて、恐る〳〵食堂へ顏を出して見ると、御主人は一向幽靈などに出會したあとかたもなく、元氣一ぱいで歩きまはつてゐるので、二度びつくりだつた。ヨハンはすぐに馬車の用意をするやう、ティネッテはハイディを起して旅行の身支度をさせるやう、セバスチャンはデーテの奉公先きのお屋敷へデーテを呼びに行くやうにと、それ〴〵吒咐けられた。

そこへロッテンマイアさんが、やつと身じまひを終へて澄まして降りて來た。見れば帽子を後向きにかぶつてゐる。ゼーゼマン氏は、少し早く起したのでこれはまた大へんな御狼狽だなとをかしくなりながら、早速仕事を呟咐けた。すぐに旅行かばんを出して、あのスキスの子供――ゼーゼマン氏はハイディの名前をうろ覺えのまゝ、いつもかう呼んでゐた――の持ち物を詰めること、それから家へも相當のものを一通りは持つて歸れるやう、クララの着物も澤山入れてやること、すべて考慮の餘地はないのであるから、さつさと取り行ふこと、といふのであつた。

ロッテンマイアさんは、ぽかんとゼーゼマン氏の顏を見つめながら、まるでそこに根が生えたやうに突つ立つてゐた、まるつきり、あてがはづれたのである。ロッテンマイアさんのつもりでは、御主人が昨夜のおそろしい幽靈の話を、長々と話して聞かせてくれるものと思ひ、白晝そんな話は面白からうと樂しんでゐたのである。ところが、この面白くもない面倒な仕事である。ロッテンマイアさんはがつかりして、でもまだ詳しい說明でもあるのかと、しばらくはまだ立ちつくしてゐた。しかしゼーゼマン氏には、この家政婦に委細を話して聞かす氣も暇もなく、そこにのこしたまゝ、さつさとクララの部屋へ行つてしまつた。クララは家ぢうのこのさわぎに目を覺まし、何事が起つたのかと、不思議さうに耳をすましてゐた。そこでお父樣はそばに坐つて昨夜の一部始終を話して聞かせ、お醫者樣の話では、ハイディの夢遊病はずゐ分ひどくなつてゐて、このまゝ嵩じて來ればだん〳〵遠くまで出かけるやうになり、しまひには屋根の上までのぼるやうになつて、危くてたまらないから、早速かへすことにきめたのだから、クララもそこをよく聞き分けてくれなければいけないと云つた。クララは大層悲しがつて、どうにかしてハイディを引き留める方法をあれこれと考へ出したが、お父樣は取り合つて下さらなかつた。その代り、おとなしくいふことを聞けば、來年の夏にはスキスへつれて行つてあげようと約束して下さつた。それでクララも、このぢうにもならない事實には爭ひがたく、やつと承知して、それではせめてハイディのすきなものを入れてあげたいから、荷造りはこゝでさせていただくやうにお願ひした。お父樣は勿論悅んでお許しになつた。

こんな時間にわざ〳〵お迎へとは、一體何事だらうといぶかりながら、デーテがやつて來て廊下に待つてゐた。ゼーゼマン氏はハイディの樣子を話し、今日すぐ山へ連れて歸つてやつてもらひたいとたのんだ。デーテは全く思ひもかけぬことで、すつかり失望した。二度と再び足踏みするなと云つたアルムをざさんのあの最後の言葉もまだ生ま〳〵しい今、勝手な時に子供をあづけたり引き戻したりしたあとであるから、又自分が連れて行けば、どんなに怒鳴られるかもわからないと思ふのだつた。そこで例の雄辯で、旅行があまり突然のことなのでけふあすといふわけには行かないし、それにずつと仕事がつかへてゐて、この先き當分は手が拔けさうにもないと斷つた。ゼーゼマン氏はデーテが行きたくないのだと見て取つたのでデーテは歸し、セバスチャンを呼んで、子供を送つて行くことを命じた。今日のうちにバーゼルまで行き、翌る日家まで送りとどけ、すぐ引き返して來るやうに、おぢいさんには詳しく事情を書いた手紙をことづけるからと云つた。

「だが、これだけは特に氣を付けておくれ」

ゼーゼマン氏は云つた。

「バーゼルには行きつけのホテルがあるから、この名刺を持つて行つて、部屋がきまつたら、何よりもまづ、子供の部屋の窓を調べて鍵をかけ、子供が寢てしまつたら、ドアにも鍵をかけるんだよ。あの子は夢遊病にかゝつてゐるから、知らないホテルなどで、うろ〳〵と夜中に玄關の戸を開けに行つたりされたら、危くてしようがないからな。わかつたかね」

「やあ、左樣でございましたか！」

セバスチャンはやつとあの幽靈の正體がわかつて、叫んだ。

「さうなんだよ。お前もヨハンも臆病者だな。家ぢうお馬鹿さんが揃つてゐるよ」

「そしておぢいさんにことづける手紙を書きに、自分の部屋へ立つて行つた。

セバスチャンは馬鹿〳〵しくて、ひとりで口惜しがつた。

「あのヨハンの阿呆が無理矢理に俺を引き戻しさへしなければ、あの白いかげについて行つて白體を見屆けてやつたんだのに。今出て來て見ろ、ついて行つて見せるぞ！」

だが今ごろいくら威張つても、こんなに明るく

部屋のすみ〻まで日の射し込んでゐる晝ひなかなら、誰だつてついて行つて見せるだらう。

ハイディは今朝、いきなりティネッテにゆり起され、何が何だかわからないまゝに、よそゆきの着物を着せられ、今度はどんなことが起るのかと、わく〳〵しながら待つてゐた。こんな山出しの小娘なんぞと馬鹿にして、ティネッテはなんにも說明してくれないのである。

ゼーゼマン氏は手紙を書き終へて、食堂にもどつて來た。朝御飯の用意が出來てゐた。

「子供はどこにゐるかね」

ゼーゼマン氏はたづねた。

ハイディが這入つて來て、

「お早うございます」

と云ふと、ゼーゼマン氏はぢつと顏を見て、

「どうだね、うれしいかね」

とたづねた。ハイディは何のことだかわからないやうな顏をして、ぢつと見上げてゐた。

「なんだ、まだなんにも知らないんだね」

ゼーゼマン氏は笑ひ出した。

「今日、いますぐ、おうちへ歸るんだよ」

「おうちへ？」

ハイディは低い聲でうなるやうに云つて、眞蒼になつた。感きはまつて、しばらくは息もつけなかつた。

「そのことをもつと詳しく話してあげようか」

「話して頂戴。もつと、もつと！」

ハイディははじめて頰を眞赤にして、うれしさうに叫んだ。

「よし〳〵」

ゼーゼマン氏は腰をおろし、ハイディにもかけるやうに合圖しながら、

「先づ御飯をどつさりお上り。それから馬車に乘つて歸るんだよ」

けれどもハイディはもう、御飯など一口ものどを通らなかつた。心もそぞろに、いまだに夢だかほんたうだかもわからず、もしかしたら又目がさめて、自分はねまきのまゝでお玄關に立つてゐるのではないかしら、などゝ思ふのだつた。

「セバスチャンに、辨當をどつさり持たせてやつて下さい。さてもこの子は今食べられさうもない、無理もないことだが」

ゼーゼマン氏は、丁度這入つて來たロッテンマイアさんに云ひ、今度はハイディに、

「さあ、馬車の支度の出來るまで、クララと遊んでおいで」

とやさしく云つた。

ハイディは待つてましたとばかり、お二階へ駈け上つた。部屋のまん中には、大きな旅行かばんが開いたまゝで置いてあつた。

「ハイディ、いらつしやいな」

クララがハイディを見付けて叫んだ。

「あたしの入れてあげたもの見て頂戴——氣に入つて？」

クララは着物や前掛やハンカチや、勉强道具などを出して見せ、

「それから、これごらんなさい」

と、自慢さうに一つの籠を高くかざした。

ハイディはのぞいて見て、飛び上つて喜んだ。その中には、十二本もの眞白なきれいな卷パンが、おばあさんのお土產に這入つてゐた。子供達はうれしさうに時の經つのも忘れ、そのうち

「馬車が參りました」

と呼びに來たので、お別れを悲しんでゐる暇なく、ちつともなかつた。

ハイディは大切な御本をとりに、自分の部屋へ駈けて行つて。これはハイディが夜も晝も肌身離さず持つてゐて、寢る時は枕の下に入れておいたので、ハイディの思つた通り、誰も荷造りする時入れるのを氣がつかなかつたのである。ハイディはパンの籠の中にこれをしまつた。それから、これもきつと忘れられてゐるだらうと、たんすを開けて、もう一つの大切なもの——赤い肩掛——を探し出した。そのほかにもう一つ何かを見付け出すと、大事さうにそれを肩掛でくるみ、籠の一等上にのせた。赤いその籠の包みは、ひどく高ばんで目立つた。それから新しいきれいな帽子をかぶつて部屋を出ると、玄關ではもうゼーゼマン氏が馬車に乘せてやらうと待つてゐてくれたので、クララとお別れを惜しむひまもなかつた。